

# 赤羽台団地の共用空間と 居住者ネットワーク

Common-Use Spaces and the Residents' Network in Akabanedai Danchi

篠原聡子

SHINOHARA Satoko

- ①「住戸」の供給から「街」の供給へ
- ②集会所というユニバーサルスペース
- ③住戸からはみ出し空間
- ④都市機能を補完した集会所
- ⑤不足と不満のネットワーク
- ⑥集会所コミュニティ
- ⑦点と線と面の共用空間

## 【論文要旨】

日本住宅公団によって昭和34年から建設がはじまった赤羽台団地（所在地：東京都北区、総戸数：3373戸）は、団地としての様々な試みが実現した記念的な団地といえる。本稿では、その中に配置された共用空間と居住者ネットワークに着目して、その関係について考察する。

その後の団地計画の中で普遍的な位置づけをもつ共用空間として集会所があげられるが、当初、計画者の中にどのように使用されるか確たるイメージはなかった。韓国の集合住宅団地の共用空間との比較から、日本の団地空間に出現した集会所や集会室は、本来、住宅の内側にあった「寄り合い」や「集会」という社会的機能を私的領域から分離する役割を果たし、その空間的な設えも日本の伝統的な続きの構成が採用されていた。また、幼児教室、葬式などにも使用され、集会所は、都市的な機能の補完の役割も果たした。しかし、集会所が既存の建築の代替的、補完的なものであっただけではなく、高齢者の集まりである「櫻の会」のような集会所コミュニティともいえるべき、中間集団の形成に関与したことも特筆されなければならない。

一方で、居住者によって設立された、牛乳の共同購入のための牛乳センターは、極めて小規模ながら、自治会という大規模な住民組織の拠点となった。また、住棟によって、囲われた中庭は、夏祭りなどに毎年使われ、赤羽台団地の居住者の、その場所への愛着を育む特別な場所となり、居住者の間に緩やかな連帯感を形成する役割を果たした。

団地という大空間にあっては点のような存在でありながら自治会という大組織の拠点となった象徴的な空間としての「牛乳センター」、一列の線のように配置され、とくに機能もさだめられず、分節されながら多目的につかわれ、多様な中間集団の形成に関与したユニバーサルな空間としての「集会所」、それらを時間的、空間的に繋ぐ基盤面となった包容する空間としての「中庭」は、居住者ネットワーク形成に多面的にかかわり、それらが連携して使われることによって、団地という抽象的な集合空間は、赤羽台団地という生活空間となった。

【キーワード】 団地、共用空間、居住者ネットワーク、集会所、コミュニティ

## ①……………「住戸」の供給から「街」の供給へ

日本住宅公団（以下、公団と呼ぶ）によって建設された赤羽台団地は、公団にとって、先行したいくつかの団地の建設を経て、住戸の標準設計が成立し、住戸設計以外の配置計画、外構計画にもその労力が行きとどき、その成果を反映した結果、様々な試みが実現した記念的な団地といえることができる。

赤羽台団地は、1959年から建設がはじまり、東京都北区の赤羽駅から5～8分の高台に位置し、23区内では当時、最大の公団団地として計画された。敷地約20ha、戸数3373戸、5階建て47棟、7階建て8棟の計55棟からなる中高層団地である。この土地は旧陸軍の被服廠跡地で、国有地であったため、都心としては珍しくまとまった土地があり、国や都からは将来の都市型居住の指針となる<sup>(1)</sup>ことが要請され、そのモデル団地として開発された。そのために、当時、郊外に建設された団地の容積率は40～50%程度であったが、ここでは70%を超す容積率を達成しており、当時としてはかなり高密度な団地となった。

また、公団における1000戸規模の団地開発は郊外型が主流で、その供給住戸の主流は家族世帯向けであったが、赤羽台団地は都市型を意識し、1K（約25㎡）から4DK（約75㎡）の3373戸からなり、単身者、夫婦世帯、核家族世帯など多様な世帯を対象とした。さらに、2DKを3DKに変更できるように住戸間の仕切り壁をブロック造にしたり、梁を外側に出したインテリア重視の設計を採用するなど、将来の都市住宅への配慮がなされた。（図1）

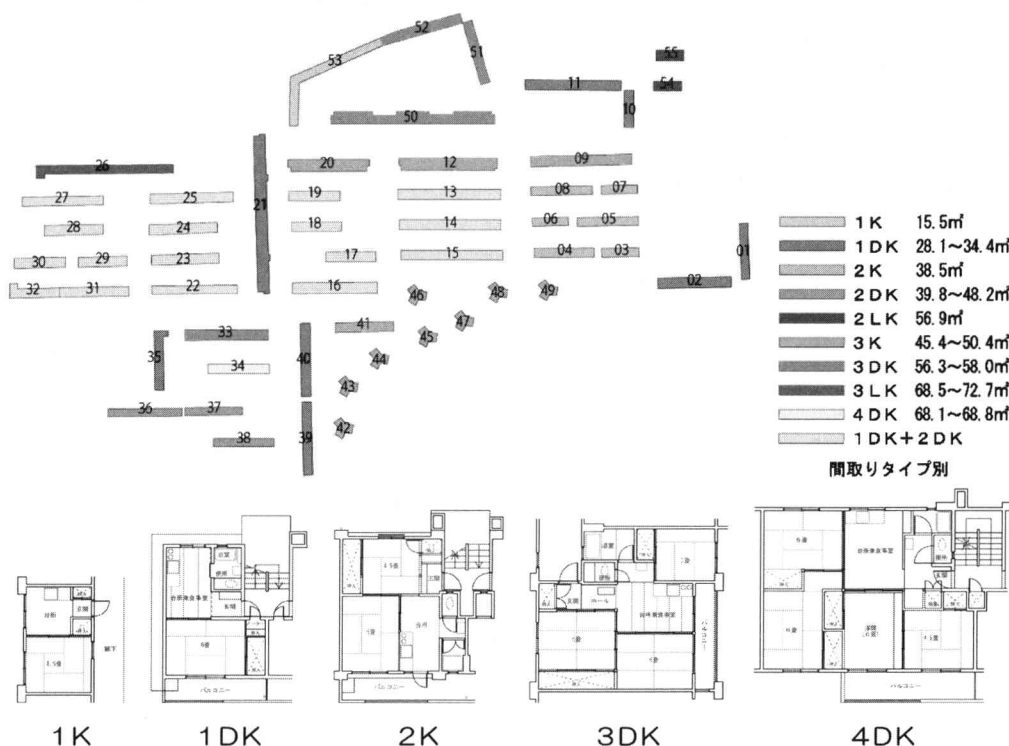


図1 多様な住戸プラン（論文末カラー図参照）

赤羽台団地の特徴は、こうした様々な住戸ミックスが行われたというだけでなく、その全体配置計画にみることができる。それは、単に住戸の供給に留まらない、街づくりへの期待をこめた目論見といえるだろう。その配置計画に大きな影響を与えたのが旧被服廠の時つくられた堅牢な道路を活用するという命題であった。(図2) 既存の道路に平行に配置すると南から45度振れるということで、単純な平行配置だけでなく、それに直交する住棟配置も可能となっている。南面平行配置は採光、プライバシーという戦後の集合住宅団地を支配した2大原則をもっとも効率よく、しかもどの住棟にも平等に実現し得る配置計画として一般解となっていたから、それを覆すにはそれなりの理由が必要とされた。<sup>(2)</sup> 赤羽台団地での直交配置や高層住棟で中庭を囲む囲み型の採用など、配置計画にみられる新機軸は、意外にも旧被服廠の時代につくられた堅牢な道路という、赤羽台の地歴の上に成立したものであった。

現在ではJRの埼京線、京浜東北線、宇都宮線、高崎線、そして東京メトロの南北線が乗り入れ、大きな商業施設が林立する駅前も、赤羽台団地の建設当時は3373戸の居住者を受け入れる都市的な機能はなく、多くの郊外型の住宅団地がそうであるように、赤羽台団地もまた新たな街として完結した機能を要求されていた。高層囲み型住棟の一階はすべて非住宅(施設や店舗)となり、団地全体のセンターとして計画されている。店舗、スーパーマーケット、診療所、銀行、郵便局、集会所などの施設がそこに集中して配された。赤羽台団地の北西側には桐ヶ丘団地も同時期に建設され、それらの人口も見込んだ都市機能の受け皿となる必要もあつた。<sup>(3)</sup>

それら商業施設を一階にもつ囲み型住棟の一辺にあたる50号棟前の通りがいわば、団地内のメインストリートとなり、21号棟はその通りのアイストップになるように配されている。この景観が、しばしば当時の団地には珍しい直交配置による都市的な景観と評される。公団の内部では団地の設

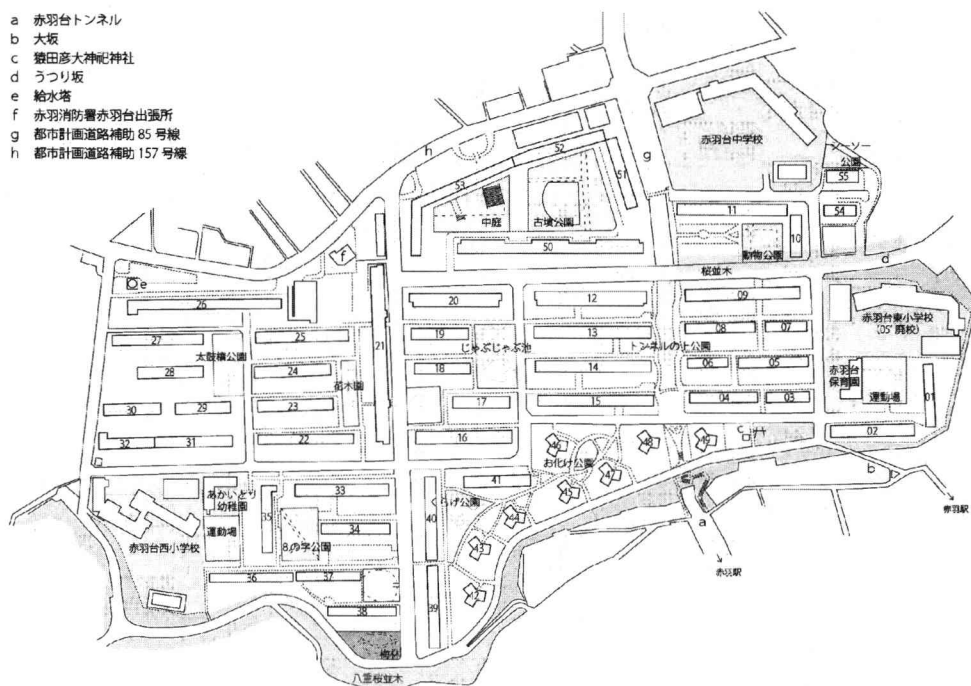


図2 画期的な住棟配置

計手法によって、〈自然派〉とか〈幾何学派〉とか、自らのグループを分類していた。赤羽台団地の配置計画に見られる設計手法については、以下のように解説されている。

「造形的な設計方法の頂点に〈幾何学派〉がある。これは団地設計の道具としての住棟配置を直交軸に沿って配置し、人工的な壁による閉鎖空間によって団地をデザインしようとする立場である。人は各種の空間の中でも囲まれた空間を特に強く意識する傾向があることは一般に知られている。また、そのようなはっきりした空間の中で各種の機能が入り交じり、あるいはたくさんの人々が集まるというようなことがあれば、それはいわばアーバンティを団地の中に実現したということなのかもしれない。この派の代表的団地が赤羽台団地で、団地自体が高密度であり、人の集まる場所としてのショッピングセンター、遊び場等は、できるだけ集約的に設けられ、賑やかな空間をつくっている。」(「団地ライフ」)<sup>(4)</sup>

この規模の団地における配置計画は、すなわち都市計画なのであり、そのことが強く意識された計画であったことが伺える。

しかし、それは、極めて人工的な空間であり、既存の街や村とは異なった住居集合の空間であった。そこに昭和37年2月の入居開始から昭和39年10月まで、たった2年8ヶ月という短期間に、3373戸の住戸に7000人以上の人々が住む空間となった赤羽台団地は、一通りの生活に必要と思われる機能がそろえられていたとしても、それは供給された「街」であり、月日を積み重ねた結果としての自生的秩序をもった街とは基本的に異なるものであったに違いない。<sup>(5)</sup> 抽選であたったというだけの、偶然に集まった人々の間にどのような関係が成立するのか、計画者の立場にたてば、それを予想することの困難は想像に難くない。

住戸の計画については、使用実態に基づいた食寝分離や就寝分離、公私室分離といった、計画理念が構築され、それが標準設計という形で成果となってきたわけだが、大規模な集合住宅団地における私的に占有される住戸以外の共用空間に対する実感をもった指針は、その創成期には持ちようもなかった。戦後に本格的にはじまった団地生活において、共用空間の使用実態を概観しながら、計画者の意図と居住者による使用の実態、さらに居住者による住みこなし、使いこなしから、人工的な集住空間が生活空間となるプロセスと、集まって住み続けるための居住者ネットワークに関わる空間的要因について、考察してみたいと思う。<sup>(7)</sup>

## ②……………集会所というユニバーサルスペース

大規模集合住宅や団地において、最も一般的な共用施設としては、集会所・集会室があげられる。赤羽台団地にも、1号室から10号室まで10室(合計450.5㎡)の集会室が設けられている。(図3)しかし、それらの集会室は、この団地を構成するその他の共用空間とは、質を異にしている。積層型の集合住宅は、その構成からして、共用空間をもつ。通路や階段などの動線空間、それに採光や通風を確保するための住棟間の外部空間などは、極めて機能的な空間であり、近代的で、健康的で、かつプライバシーの確保された住環境を担保するものである。また、赤羽台団地では、5から6住棟からなるブロックには、必ず、児童公園があり、それがそれぞれのブロックの中核をなしており、まず第一にこの場所が子育て空間として、認識されていたことがわかる。したがって、これらは、

極めて明確な目的に沿って計画されたものである。

一方、集会所は、「集会」という目的空間のようにみえて、実際は、機能の定まらない空間として計画されている。現在の分譲型集合住宅であれば、集会所の使用用途の第一は、「管理組合の理事会」である。しかし、赤羽台団地は賃貸住宅であり、その管理は公団が行っていたので、建物の維持管理のための管理組合の必要もなく、抽選であたった入居者たちの間にこれといった集会をするような関係もなく、具体的な用途が想定されない空間として計画されたと推測される。

「日本住宅公団10年史」には、「光ヶ丘の経験はただちに他の団地にも適用された。団地は必ずコミュニティとしての中核施設をつけて建設されることになった。それは、団地の規模により、又周囲の状況により様々であったが、最小限度の管理事務所と集会所は必ず付けられることとなっていた。こうして始まったものの、実を言えば集会所というものの、イメージはなかなか明瞭になって来なかった。観念的に言えば、人の大きい集団がある所に、その人々が「集まる」ということについてどのようなビヘイヴィヤーをとるかということは、それがまったく経験されていないことなので分からなかった。

集まりは吉凶禍福のことから、団地の運営についての会議、親睦会、講習や文化サークルなどのグループ活動、集団診断などの医療活動から、児童の問題、保育又は幼児教室というようなことになっているまでの様々なケースがあり、しかもその集会の持たれ方も団地によって様々であった。すべては、運営する当事者にとっても、又それを計画し、設計する当事者にとっても、手さぐりで当たらねばならぬことばかりであった。」と設計当時の様子が記述されている<sup>(8)</sup>。

このように、当時の公団の中でも、団地という空間の中でどのような事態がおき、住戸以外のど

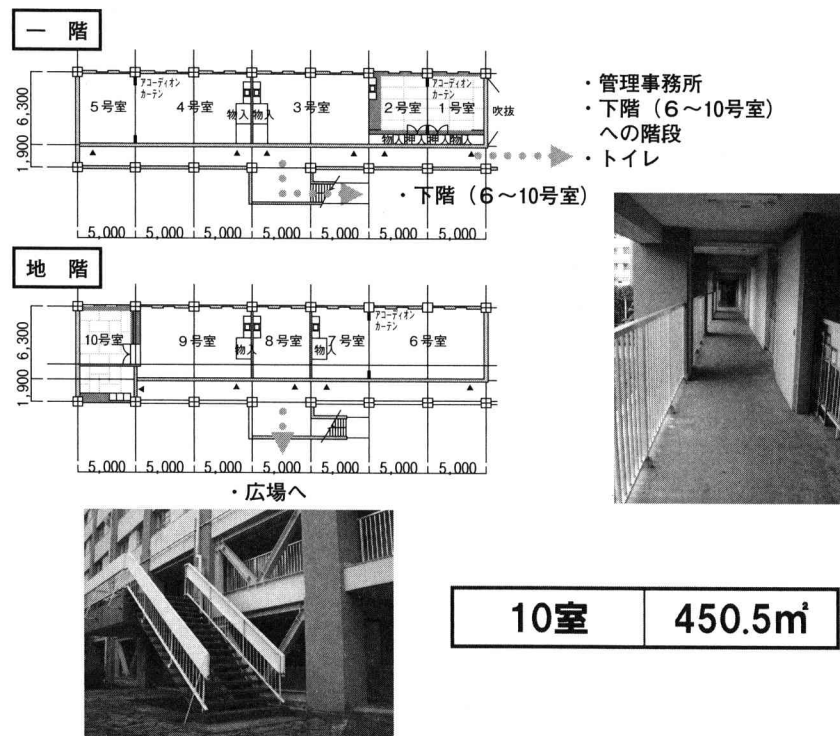


図3 赤羽台団地 集会所平面図

のような空間が必要とされるのか、明確なイメージはなく、おこりうる事態の弾力的な受け皿として集会所が計画されていたことがわかる。

### ③……………住戸からはみ出し空間

こうした集会所のようなユニバーサルな共用空間の有り様は、近隣諸国の集合住宅団地と比較して、極めて特殊な事例ということが出来る。ここでは、ソウルの集合住宅団地の事例と比較しながら、まずはその独自性を述べることにする。<sup>(9)</sup>

大韓住宅供給公社によって建設された高德住公アパート団地は、ソウルの東、江東区にあり、1982年から1984年にかけて開発された団地であり、1団地から7団地まであり、一団地ごとに管理がなされている。団地によって異なるが、おおむね6割が傳貫（チョンセ）で4割が分譲である。都市の中間層にむけた団地で、その構成は同時期に建設された他の団地と大差ないものということができる。ここにおける共用空間は、住戸にいたる単純動線以外では、管理事務所、児童などの公園、老人亭、などがあげられる。（図4）また、教会の一部も共用空間としての役割を担っている。

外部を構成する要素としての児童公園は、赤羽台団地のそれと大差ないが、児童公園以外にも、大人が散策をしたり、軽い運動をするための場所がもうけられている。老人亭は、韓国の建築規定によって、都市の集合住宅団地に附置することが義務付けられている（韓国住宅建設基準に関する

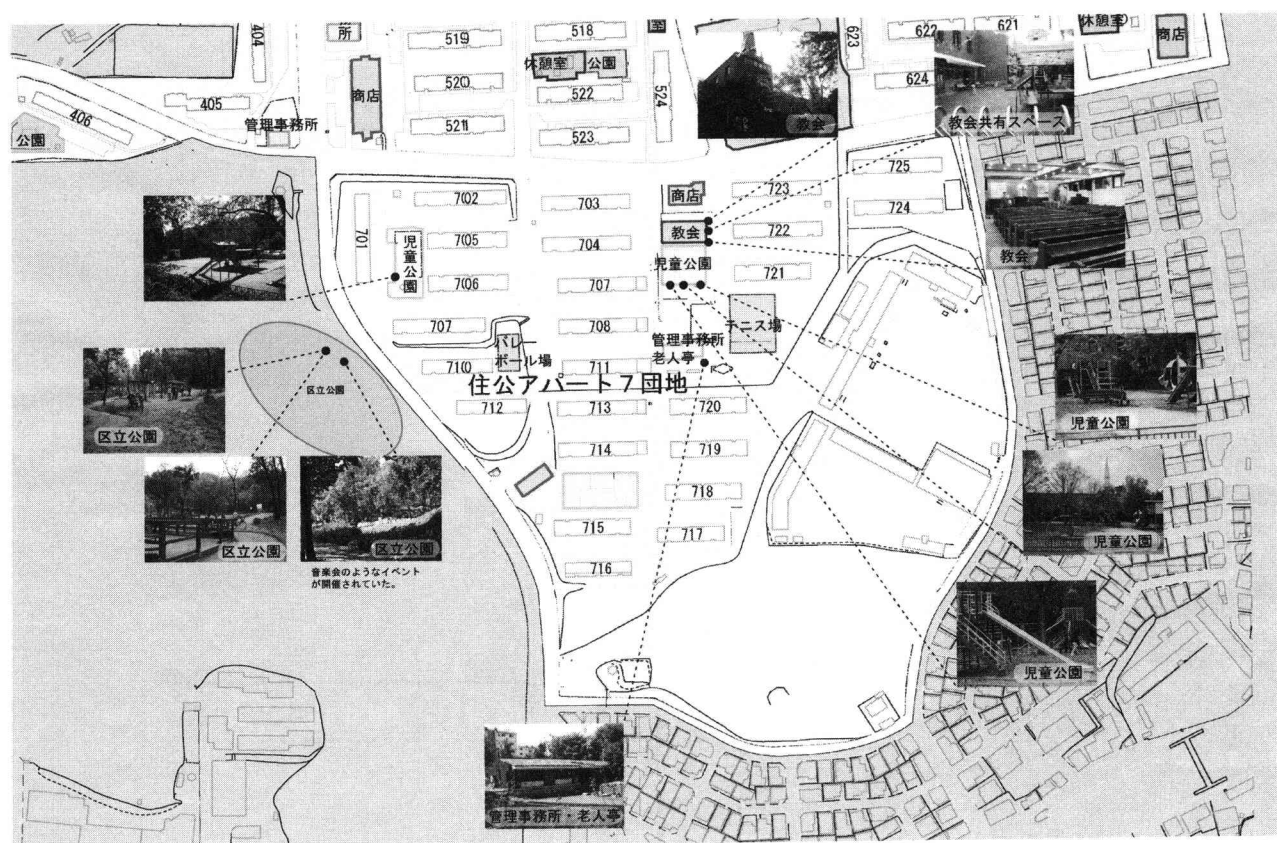


図4 ソウル 高德アパート(7団地) 配置図



規定第33条)。60歳以上の高齢者のための施設で、男女に分かれていて、テレビを見る、昼食をとる、花札（女性）や麻雀（男性）をやるといった、昼間の居場所空間となっている。その運営には、行政から経済的な助成もある。そのほか、内部空間をもつ共用施設としては、スポーツジムを設けている団地もあるが、同様の年代に建設された韓国の団地空間に共通してみられるのは老人亭が唯一である。

このように、高德住公アパート団地において共用空間は、いずれも明確な目的のためにあり、日本の集会所、集会室というようなユニバーサルな空間はない。<sup>(10)</sup> 住棟ごとに、班常会（バンサンエ）という集会をする慣例があるが、これはすべて回りもちで、それぞれそのときの当番の住戸で行われる。私たちが2006年にインタビューに行った住戸では、班常会はもちろんのこと、リビングルームの一角で子供のための塾を開くなど、開放的なリビングルームの雰囲気を持っていた。日本の住戸とは異なって、玄関がなく、直接居間にはいる階段室型の住戸平面は、居住者以外の訪問者に対してアクセシビリティの高い空間構成で、住戸に多様な用途をもたらしていると推測される。（図5）班常会のような近隣との付き合いは、住戸内で行うものであり、そのための共用空間という発想はない。

日本でも、伝統的な住居は、コミュニティ内の大小の寄り合いを行う空間及び空間構成をもっていた。したがって、日本の団地空間に出現した集会所や集会室は、本来住宅の内側にあった集会という社会的機能を住戸から分離することを意味することになった。

一方、韓国の老人亭については、住空間からの私的領域の外部化といえる。男女の部屋で設えは

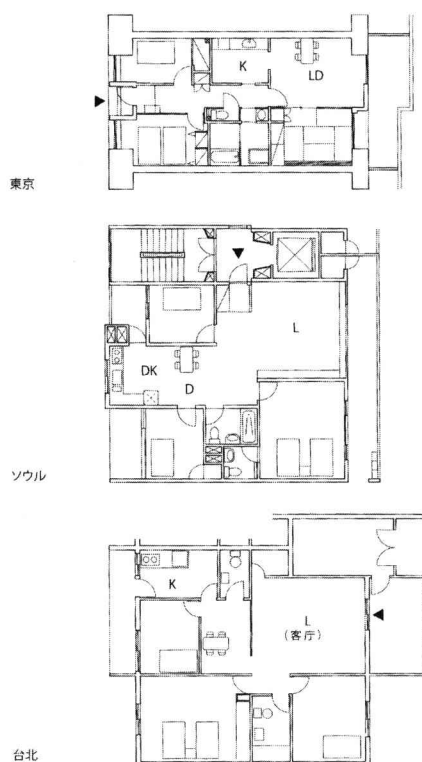


図5 東京・ソウル・台北の一般的な集合住宅の住戸平面



図6 老人亭の内部（女性の部屋）

異なるが、たとえば、女性の部屋であれば、大きなソファがあり、テレビがあつて、部屋の一角にキッチンもある。(キッチンは、図6のように共用のゾーンにある場合もあるが、使用するのは、もっぱら女性である。) 男性の部屋は一般的に椅子とテーブルがあり、キッチンはなく、必ずといって良いほど老人会の会長用のデスクがあり、女性の部屋とは趣が異なる。(図6) それは、オフィスの再現のようでもあるし、家長の書斎にも見える。いずれにしても、高齢者がそこで、食事をしたり、休息をしたり、趣味を楽しんだりという居場所として作られており、毎日通ってくる高齢者にとって、そこは住居の延長なのである。(したがって、老人亭に登録していない高齢者にとっては、他人の住戸のように、まったく関係のない空間なのである。)

このように、共用空間を住戸の機能との連続でみていくと、日本の場合も韓国の場合もともに、集会所・集会室は、住戸からはみ出し機能が期待されているが、日本の団地では、「集まる」という住戸の中の社会的機能の分離が意図され、韓国の老人亭では「高齢者の居場所」という住戸の中の私的領域の外部化が意図されていたことがわかるのである。

#### ④……………都市機能を補完した集会所

赤羽台団地の集会所(図3)は、1～10室までであるが、実際には1号室と2号室が和室の続き間で、4号室と5号室、6号室と7号室、9号室と10号室(和室)は連続して使用できるようになっている。単身者棟の低層部に位置しており、5m×6.3mと間口、奥行きともに小さいので、こうした単位空間を繋ぐような構成になったとも考えられるが、間仕切りによって伸縮する空間をつくり、多様な行為に対応しようとする手法は、伝統的な農家の田の字型プランの手法である。この5m×6.3mの中に和室をつくるとすると、広縁や押入れのための空間を取り込んで大体10畳の和室ができ、これは前述の田の字型平面を構成する基本的な単位である。

実際に、この集会室は、多様な使用状況を生み出した。先に述べたような、住戸からの「集まる」という社会的機能の外部化としては、「葬式」があげられる。「葬式」には、9号室と10号室(和室)が主として使用された。赤羽台団地において、現在、「葬式」に集会室が使用されるのは、年間1回から2回であるが、20年程前に筆者が公団の集会室を設計した時点では、葬儀は、集会室の主要な用途のひとつとして、設計条件の中に組み込まれていた。(図7)

「葬式」に関しては、住戸からはみ出し行為でもあるが、一面では、集会所が宗教施設の代替となったということもできる。公団の団地内には、宗教施設は計画されない。前出の高徳住公アパートには、教会があり、これも韓国の団地と日本のその大きな違いといえる。韓国の団地には、集会所のような多目的な空間はないことを述べたが、教会がそのような機能の一端を担っている場合は少なくない。布教活動の一環ではあるが、老人大学(教会の信者などのボランティアによって運営され、高齢者のために、体操やコーラス、習字などの教室を開いている、対象は信者に限らず、近隣の居住者一般である。)や子供のための様々な教室など、赤羽台団地では、集会所で行われるようになる行為が教会内のイベントとなっている。地域コミュニティにとって、宗教施設が一定の役割を担うのは、既存の都市空間においては、ごく自然なことであり、一切宗教施設のない「街」の方が特殊な都市といえる。したがって、集会室における「葬式」は、宗教



	1号室	2号室	3号室	4号室	5号室	6号室	7号室	8号室	9号室	10号室
面積	31.5㎡	31.5㎡	63㎡	63㎡	31.5㎡	63㎡	31.5㎡	31.5㎡	63㎡	41㎡
内装	和室	和室	洋室	洋室	洋室	洋室	洋室	洋室	洋室	和室
使用状況	11.0 日/月	15.0 日/月	21.5 日/月	23.0 日/月	4.5 日/月	23.5 日/月	11.0 日/月	12.0 日/月	11.5 日/月	7.5 日/月
	2.6 時間/日	3.2 時間/日	5.0 時間/日	4.0 時間/日	3.6 時間/日	3.7 時間/日	5.0 時間/日	4.2 時間/日	5.8 時間/日	5.0 時間/日
	老人部 日舞 北区子供お話会	老人部 日舞 北区子供お話会 手芸	ダンス フルート ピアノ 読書会 書道	ダンス 舞踏 太極拳 生活勉強会 読書会 自治会	ダンス 舞踏 自治会	バレエ カラオケ 空手 気功 自治会	バレエ カラオケ 空手 気功 自治会	バイオリン 朗読 ボーイスカウト	葬儀 ダンス お花・木彫	葬儀 生活勉強会
備考	1・2号室を一体的に使用(63㎡)		ピアノ二台あり。 (ただし、使用は 一台)ピアノ・フ ルードで使用し ている。	4・5号室を一体的に使用(94.5㎡) 5号室の使用のおおくは4号室と 併用時。(ダンス・舞踏・自治会)		6・7号室を一体的に使用(94.5㎡) 7号室の利用のおおくは6号室 と併用時(バレエ・自治会)ピア ノあり。卓球台あり。		ピアノあり。	葬儀では、9・10号室を一体的に 使用(104㎡)	

図7 集会室使用状況(2007年5月6月)

施設という都市機能を補完した使用ということもできるだろう。

また、1963年から1987年までの24年間、自治会は、集会室を利用して、幼児教室を開いていた。学齢以前の子供を持つ世帯が多かった時期、赤羽台団地の周辺には、幼稚園や保育園が十分ではなく、赤羽台団地の居住者は、居住者の中から教員や保母の資格のあるものをつくり、自前で集会室を利用して幼児教室を開いた。(図8) 赤羽



図8 幼児教室の写真

台団地は、同時期に建設された他の団地より、家賃が高く(昭和37年2月第一期の募集時、もっとも多く供給された2Kは、7900円から8400円であった)夫婦共働きが多かったため、幼児の保育環境を整えることが急務であった。これもまた、都市機能の補完ということができる。

## ⑤……………不足と不満のネットワーク

集会所における都市機能の補完といっても、幼児教室の開設は、「葬式」使用とは、意味が異なる。ひとつには、子供を預ける親族が、もはや団地にはいないことを意味している。(現在でも、韓国、台湾、中国において、孫の養育に祖父母が果たしている役割は非常に大きい。)新規住宅募集時の応募者の年齢は40歳代以下で9割をしめており、しかも世帯員数は2人以下が8割であった。団地の家族は小さく、しかも若かった。韓国では、集合住宅に3世代で暮らすことは、珍しいことではないが、日本では、積層型の集合住宅居住は、ほとんど核家族での居住を意味する。公団の標準設計のベースが当初は2DKであり、これは子育て期の核家族を想定したものであったから、当然の結果ということもできるが、ここで着目したいのは、赤羽台団地において、非常に短期間に保育という問題が共有され、「幼児教室」という組織が形成されたことである。さらにいうなら、入居開始の翌年には、自治会が組織されたことも居住者ネットワークの形成という観点から、大いに着目される。

「相当な高家賃の集団であるという特質は入居者に一人一人の場合にはハッキリと表れてこないような不満を、拡大的に集約して公団につきつけるという形で、団地管理上の問題点を露呈させた。」(「日本住宅公団10年史」)<sup>(11)</sup> 団地という機能空間では、生活にかかわる諸問題も、隠れる場所がない。機密性の高い住戸の中でガス暖房をつかうと、コンクリートの壁は、雨漏りがしたように結露する。伝統的な日本の住居なら、そもそも機密性が低いし、火鉢の暖房能力も弱いから結露などとは無縁である。慣れない団地暮らしに、居住者も管理者もしばしば予想外の事態に直面し、そうしたときに居住者は集団を組織して公団に対策を要求し、公団は圧力団体となった居住者集団に苦戦した。

しかし、居住者は単に公団へのクレーマーとなっただけでなく、そうした不足や不満を自ら、発展的に解決するべく、自治会など組織を立ち上げるのである。赤羽台団地に関して言えば、そうし

た組織が形成され、長期間にわたり維持された要因のひとつとして、集会所というユニバーサルな空間の存在をあげることができるだろう。

## ⑥……………集会所コミュニティ

集会所は、団地の生活の時間的、質的変容を受け止めながら、その時々住戸という私領域のはみ出し空間として、また都市機能の補完的な場所として使用されてきたが、そこはただ、何かの代替空間や補完空間であったわけではなく、居住者ネットワークという観点からみると、また異なる様相がみえてくる。

2005年から2007年にかけて、居住者がどのような個人的なネットワークをもつか、どのような生活圏をもつかを調査したとき、団地の中で、比較的緊密なネットワークをもっている居住者には2つのタイプがあることがわかった。<sup>(12)</sup>

ひとつは、自分の住戸を開放して、人を招くタイプ。商店街の向かいのダイレクトアクセスの住戸（廊下を経ず、外部空間から直接住戸に入ることのできる一階の住戸）に居住するSさんは、扉の前の空地を庭のように設え、扉に網戸をつけ、スチールの玄関ドアはいつも開けっ放しで暮らしていた。買い物帰りの友人がふらりと立ち寄ることもあり、しばしば、Sさんの住戸は友人のたまり場になっていた。こうした住戸を拠点としてネットワークを築いている居住者がいる一方で、「樺の会」（毎週月曜日、集会所で集う）の会に属して、その会を拠点としてネットワークを築いている居住者もあった。「樺の会」は、1970年に、団地の中の高齢者の会として発足し、現在まで続いている。何か特別の目的をもった会というよりは、団地の中の高齢者のコミュニティである。この会に属するある居住者は、自身の住戸に人を招くことはほとんどなく、人間関係の拠点が「樺の会」であり、集会所なのである。

個別の付き合いよりはやや幅広く、自治会のようなガバナンス的な組織でもない、日常生活を支える中間集団の形成は、その活動拠点となる集会所という空間なしには考えられなかったであろう。こうした中間集団にとって、安定的に使用できる場所が生活圏内に確保されていることは、関係継続の重要な要因となる。赤羽台団地の集会所は、「集会所コミュニティ」とも呼べるような、いくつかの中間集団の拠点となってきたのである。

## ⑦……………点と線と面の共用空間

本稿では、集会所に重点を置いて述べてきたが、赤羽台団地の居住者ネットワークという視点から、共用空間をみたときに、50、51、52、53号棟によって囲まれた中庭と51号棟の足元にある牛乳センターについて、付け加えなくてはならない。

中庭は、前述の幼児教室の園庭としても使用され、集会所はこの中庭に連続することで、視認性を保ち、用途の多様性を確保してきた。また、一昨年まで夏祭りの開催された場所であり、居住者からもっとも愛着をもたれている共用空間のひとつである。<sup>(13)</sup>

牛乳センターは、居住者が自ら獲得した共用空間である。牛乳を保管するための冷蔵庫を設置す<sup>(14)</sup>

る施設で、そのほかには、事務机と数人がかけられる小さな打ち合わせテーブルがあるだけであるが、ここが長年自治会活動の拠点となってきた。自治会は設立当時から、自治会室を公団に要求してきたが、認められず、ここに拠点をおくこととなった。

結果としては、3373戸の団地の中にあつては、点のような存在の牛乳センターは、文字通り団地のセンターでもあった。自治会という大きな集団が、小さな拠点しかもたず、場面場面で、その活動が、集会所や団地に隣接する小学校などに波及することで、自治会活動が比較的開かれたネットワークとして維持できたとも考えられる。

点のような、しかし拠点となった牛乳センター、一列の線のように配置され、とくに機能もさだめられず、分節されながら多目的につかわれた集会所、それらを時間的、空間的に繋ぐ基盤面となった中庭は、居住者ネットワークの形成に多面的にかかわり、それらが連携して使われることによって、団地という計画的に構築された抽象的な住居集合の空間は、赤羽台団地という居住者によって住みこなされた生活空間となったのである。言い換えれば、居住者が構築したネットワークを象徴する空間としての「牛乳センター」、多様なネットワークに対応するユニバーサルな空間としての「集会所」、時間的なネットワークの変化を包容する空間としての「中庭」の連携が、深く居住者のネットワーク形成とその変容に関わってきたことが見出された。

既成市街地では、戦後一貫して縮退の方向に動いていた近隣コミュニティが、予想に反して、人工的な空間である赤羽台団地の中で、新たに形成され成熟するプロセスをみることができた。ここに見出された空間的な因子も、むしろ団地空間における特別なものというよりは、本来地域コミュニティの形成に関わる基本的な空間的な要因といえるだろう。戦前戦後を跨いで、手垢にまみれた近隣共同体＝コミュニティが、団地という新しい空間の中で、場所のリセットと同時に、ネットワークのリセットが行われた結果とも言える。と、同時に、ここで自治会を形成し、いくつもの中間集団を形成した人々は、近隣共同体を経験した人々でもあった。短期間に居住者間に問題の共有がはかられたり、自治会が形成されたりした経緯は、そうしたネットワークに対するイメージが共有されていたことの影響を抜きに考えることはできない。

したがって、現在進行している赤羽台団地の建て替え、空間のリセットによって、同様な事態が簡単に再現されるとは思えない。団地を取り巻く周辺の状態も入居が開始された1962年当時とは比べ物にならない。すでに、皆が瞬時に共有できる不満も不足も、見えにくい。それでも、生活空間としての赤羽台団地になんらかの継続性を持たせることには、意味がある。その場所への緩やかな帰属感は、居住地としての安定的な運営には不可欠だからである。計画者の設計理念によって構築された抽象的な住居集合の空間が、居住者によって、様々に読み込まれ、使いこなされ、あるときは牛乳センターのように新たに建築が付加されながら、人々の生活空間となってきた。そうした居住者による自生的な生活空間としての赤羽台団地の継続性に対して、新たな建築の計画がどのように参与することができるのか、私たちの一連の調査の目的はそこにある。

## 註

- (1)——戦前、北区には多くの軍事施設があり、中でも赤羽に集中していた。赤羽は、それらの施設への食料や物資の調達のための商業や関連産業によって発展した街であった。
- (2)——配置計画に限らず、公団は良質の住宅を速やかに大量供給するために標準設計という手法を確立したが、標準設計が居住者の居住性に対するスタンダードになることによって、しばしばそれが公団自身の足かせとなり、新たな試みを難しくしていた。
- (3)——2003年に東京都北区飛鳥山博物館において、「企画展 団地ライフ―「桐ヶ丘」「赤羽台」団地の住まいと住まい方」と題した展覧会が行われ、冊子「団地ライフ」はその折に編集され、両団地の典型的な平面図や配置図、設計当時の社会背景などを記載している。
- (4)——日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻・篠原研究室では、2007年7月に、赤羽台団地の全体計画・住戸タイプなどの設計資料や団地の変遷をたどる写真資料などを「赤羽台団地 1960-2007 miscellanea」としてまとめた。
- (5)——赤羽台団地への新規入居者募集は、1962年から1964年にかけて、9回に分けて行われた。
- (6)——集合住宅団地における共用空間とは、廊下や階段、エントランスホールといった動線空間やゴミ置き場、駐輪場、駐車場のように必然的に共有される空間と、集会所や戸外の中庭のように、居住者による共同の行為を想定したものがある。居住者間のネットワーク形成という視点からは、いずれの共用空間も無視できないものであるが、特に後者の共用空間の設えは、しばしば計画者の集合住宅団地に対する設計理念に左右されるところが大きい。
- (7)——住居学・建築計画分野における共用空間に関する先行研究は極めて多岐にわたるが、集合住宅団地の共用空間を対象として、本論に類似して、その空間的な特質と居住者の住みこなしの関係を通時的な視点で分析した近年の事例としては、「集合住宅団地における共用空間の配置・属性と行為の関係」(2007年 中村直美・大橋寿美子・小谷部育子 日本建築学会学術講演梗概集)がある。
- (8)——「日本住宅公団10年史」は1965年7月に刊行され、「日本住宅公団が、住宅政策推進のホープとして創設せられ、」という序文からはじまり、当時の公団の

社会的な位置づけが伺われる。「第2章アパート住まいとコミュニティの形成 5コミュニティの建設 5-3コミュニティの核―集会所の問題」P149より、本文の引用を行った。

- (9)——日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻・篠原研究室では、2004年から2006年にかけて、韓国ソウルの大韓住宅供給公社によって建設された団地を対象として、老人亭を中心とした共用空間と住戸空間が居住者間のネットワークの形成にどのような役割を担ったかを調査した。
- (10)——モダニズム建築の典型としてのインターナショナル・スタイル(国際様式)において、ユニバーサル・スペースは「目的によって拘束されない、多目的に使用できる普遍的な空間」を意味する。本来は、柱梁構造によるグリッドプランニングの大空間をさすが、本論では「目的によって拘束されない、多目的に使用できる」という部分で、「ユニバーサル」という言葉を使用している。また、モダニズムへの批判的言説の中では、ユニバーサル・スペースは、「何の特質も持たない無機質な空間」という意味でも使われる。
- (11)——前掲「日本住宅公団10年史」の「第1章住宅公団の誕生 4公団事業の展開 4-2コミュニティの経営の確立へ」p.129より、引用した。
- (12)——2006年、筆者は、早稲田大学建築学科古谷誠章研究室との共同研究で、赤羽台団地の居住者60人に対して、高齢者の生活圏を中心としてヒヤリング調査を行った。
- (13)——赤羽台団地の居住者に対する団地内の「好きな場所」を尋ねたアンケート調査(日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻・篠原研究室)を2002年と第1期の戻り入居が完了した2007年に行った。「中庭」は、2回とも、「トンネルの上公園」「梅林」とともに上位に上げられた。
- (14)——赤羽台団地自治会機関誌「あかばね台」は、たびたび自治会牛乳の記事を掲載しており、牛乳の共同購入が自治の象徴であったことが伺える。牛乳センターは、北区が公団から土地を借り、それを自治会がさらに借り受けるという形で、1972年に建設された。
- (15)——赤羽台団地の建て替えは、第1期が2004年に着工し、2006年に戻り入居、第2期が2008年に着工し、2010年に戻り入居を開始した。

## 引用・参考文献

- 「赤羽台団地 1960-2007 miscellanea」(日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻・篠原聡子研究室編)  
 「団地ライフ」(2003年 都市基盤整備公団技術監理部設計課/北区飛鳥山博物館編)  
 「日本住宅公団10年史」(1965年 日本住宅公団編)

- 
- 「集合住宅団地における共用空間のあり方とコミュニティ形成の可能性に関する考察－ソウル上溪住公アパート，高德住公アパート，及び赤羽台団地の実態調査を通して－」（五百原沙織／日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻・2005年修士論文）
- 「高齢者の居室内及び都市における領域形成に関する研究」（中尾洋子／早稲田大学理工学部建築学科・2006年度卒業論文）
- 「赤羽台団地の共用空間に関する考察」（海老原珠絵／日本女子大学家政学部住居学科・2002年度卒業論文）
- 「赤羽台団地の共用空間と住民ネットワーク」（篠原聡子／2004年「ニュータウンにおけるジェンダー変容」平成13～15年度科学研究費補助金 基盤C 研究成果報告書）
- 「赤羽台団地におけるコミュニティの変遷と空間の使用に関する考察」（海老原珠絵／日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻・2004年度修士論文）
- 「住まいの境界を読む 人・場・建築のフィールドノート」（篠原聡子／2008年 彰国社刊）
- 「記憶を引き継ぐ団地建替え ネットワーク・愛着・住みこなし」（篠原聡子・田野耕平／2010年「現代集合住宅のリ・デザイン 事例で読む『ひと・時間・空間』の計画」日本建築学会編 彰国社刊）
- 「赤羽台団地周辺市街地整備等検討委員会 報告書」（1997年7月 住宅・都市整備公団東京支所）
- 「赤羽台団地を振り返る 団地及び団地周辺地域の履歴，環境資源と当時の計画・設計の考え方総括」（2004年3月 都市基盤整備公団 東京支社）

（日本女子大学大学院家政学研究科，国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（2010年11月29日受付，2011年5月20日審査終了）

---

## **Common-Use Spaces and the Residents' Network in Akabanedai Danchi**

SHINOHARA Satoko

The Japan Housing Corporation started the construction of Akabanedai Danchi (location: Kita-ku, Tokyo; total number of houses: 3373) in 1959, and it can be said that it is a commemorative housing development in which various attempts towards housing development were realized. This article focuses on the common-use spaces and the residents' network introduced by this housing development project, and their relationship is considered.

An assembly hall is a common-use space that has been universally positioned in subsequent housing development plans. At the beginning, however, planners had no clear image of how it would be used. A comparison was made between the common-use space in Korean housing development and that in Japanese housing development. The result showed that the assembly hall or assembly room, which appeared in the Japanese housing development space, originally played the role of separating the social function of "get-together" or "assembly," which existed in private housing, and that the traditional Japanese continuity structure was adopted in its spatial facilities. The assembly hall was also used for children's classes, funeral wakes, etc. and played the role of complementing urban functions. It is also important to remember that the assembly hall was not only an alternative or a complement to the existing building, but that it also contributed to the formation of an intermediate group that is akin to an assembled community like "Keyaki-no-kai," which is a group of elderly people.

On the other hand, the milk center for the group buying of milk, which was established by the residents, became the base of the large-scale residents' organization, the Residents' Association, although the base is very small. The patio surrounded by the residential buildings was used for the summer festival every year, functioned as a special place to which the residents of Akabanedai Danchi became attached, and played the role of gradually forming a sense of community among the residents.

The "milk center" as a symbolic space was configured like a point but became the base of the large organization, the Residents' Association. The "assembly halls" as a universal space were arranged like a row of lines, with no specific function determined, were segmented for multiple purposes and contributed to the formation of various intermediate groups. The "patio" as an enclosed space became a basic area temporally and spatially connecting the halls. These common-use spaces were involved in the formation of the residents' network in a multifaceted manner and were used in

---



---

coordination. As a result, the abstract collective space of a housing development turned into a living space of Akabanedai Danchi.

Key words: housing development, common-use space, residents' network, assembly hall, community

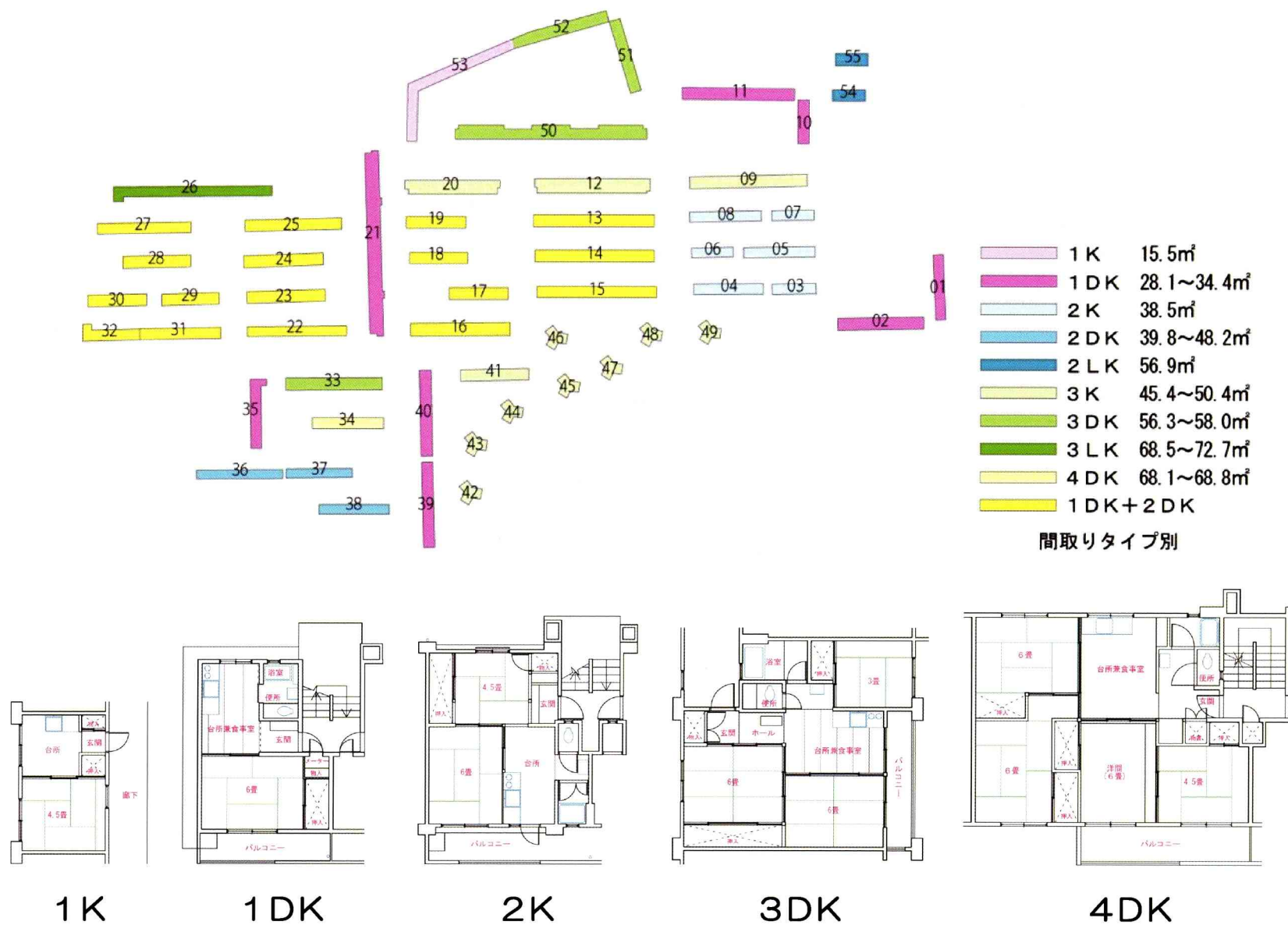


図 1 多様な住戸プラン